

あの日の事

三月十一日のあの日、急に大きな地震が  
おこりました。ぼくたちは、まっ先に、つく  
えの下に下がり、大きなゆれで、物が落ちて  
いくのを、静かに見ていました。そして、ま  
さる先生が、その時、  
「にけるぞ、うわぎを着ろ。」

と大きな声でいいました。ぼくたちは、いっ  
せいに、走り出して、綾ひめホールに白かい

2

ました。ぼくたちは、学年なかんけいなく、  
何かにおそわれている、動物のように、綾ひ  
めホールに向かいました。そして、そこに、  
すわっている、ぼんどの人が泣いていま  
した。この時の、フラスライトも泣いていま  
した。そして、ぼくも、それを見ていると、  
泣きそうになつて来ました。そして、ぼくたち  
は、上にあえきまで、また走りました。そし  
て、そこで、ぼくは、想をういていなかったと  
とか、おきました。みんな、もあふながらう

ろ

4

ていたところ、たまたま海が見えました。そして、海の方から、何かか、すがいいきおいで来ました。それは、波でした。そして、津波が来た。頭にかかれました。そして、家は、大じょうぶかなと思いました。海の近くだからだ。先生が、

「中学校へ行くぞい」と言いました。そして、ぼくたちは、歩きました。そこには、綾里の人も歩いていました。そして、ビーグーに

上がる坂の上で、綾里が、木や、レンガの海になつていました。ぼくは、まっ先に家の方を見ました。そしたら、なくなっていました。そして、ビーグーの体育館でしばらく体んだあとに、中学校へ行きました。そこは、とてもさくらかのたです。そして、そこでぼくは、残っている人と、話しました。そして、五時のチャイムの音が、始めて、悲しい音楽だと思いました。ぼくは、地しんお、おさまて、津波も終ったよと教えているようでした。

6 5

五時のチャイムが終っても、ぼくは、話を  
 しました。そして、しばらく話したあと、ぼ  
 くは、姉ちゃんや、お母さんといるところに  
 いって、ぼくは、うそんをかぶっておわりま  
 した。ぼくは、その時に、地しんがおきた時  
 の事が、夢におきないように願って、おわり  
 につきました。そして次の日の朝、おきたら  
 まだ、ほとんどの人たちがおていました。時  
 計を見たら、あの時の時間のままでした。そ  
 して、ぼくは、またうそんの中で、いってし  
 ていきました。そして、と中で、トイレにいま  
 たらなつて、うそ山ひろし君の家族が、まだ  
 おていました。ひろし君もまだおていました。  
 そして、トイレをした後、流そうとしたら、  
 水が出ませんでした。ぼくは、何回もおした  
 けれど、水は、出ませんでした。お出ないな  
 らと思いました。しばらくしたら、お母さんに  
 そのことを言ったり、  
 水止まってるよ。  
 と言われました。ぼくは、何にもすることがな

8

7

かつたので、外いつていいと言ったら、ダ  
 だと言われませんでした。そして、ぼくは、中学  
 校の体育館を歩き回りました。そして、いろ  
 いろ遊んでいると、朝のごはんが来ました。  
 ぼくは、いつか食べたのもういつかは、と  
 ときましました。そして、そろそろ君が見えたの  
 でいきました。そして、ぼくたちは、遊びま  
 した。体育館のおきに部屋があつたのでそこ  
 にいきました。そして、今の一年生の、み  
 ぎ君たちなどを見かけました。そこで、お  
 にぎゅうをもらって、遊びました。午後お  
 目いことをして遊びました。夜は、今、中  
 のかずま君と遊んだりしました。うだんは、  
 坂はない、高校生とも遊びました。そこには  
 野球をやっている人たちがいて、いろいろ  
 こてを数えてもらいました。そして、トラコ  
 力をしたりして、津波があつたことなんび  
 あずれていました。でも、一番おにぎりにいた  
 のは、あまり顔を見ない友達のことを尋ねま  
 した。ある日、まごる先生が、中学校に來ま

10

9

ました。そして、しばらく話していったら帰りました。そして、まさを先生が帰っていつても、ぼくたちは、遊びました。ある日のことですよ。ぼくたちは、光君の家にとまり、遊んでいました。光君の家の近くにある川は、木や、まだ使える物がたくさんありました。そこは、まるで、ガラスの宮殿といってもいいぐらいでした。少し波がひいてきたところだったので、道はる君とか、たけし君たちの家などの人たちが、ゴミを取っていました。

そういう生活がしばらく続いた時に、お母さんの口から、

「学校があるよ」

と言いました。そこで、ぼくは、うれしかったですよ。そして、ついに、その時がやってきました。そして、ぼくは、朝起きてから、いっ人ひをして、からい学校へ行きました。そして、ら、中学校には、いっぱい人がいました。全員がそろって、始業式を行いました。先生たちは、全員が生きて帰って来てくれたのは、

12

11

うれしいことです。と、泣きながら言ってい  
ました。そして、少しフリリとやめたあと  
に、図書館へ行きました。学校がなかった時  
に、変わったことがなかったかと聞かれまし  
た。そして、その日は、ちようど、もりあか  
しく行く時だった。それで、いつも人が終つて、お  
母さんがおかえにきました。そして、長い時  
間をかけて、お母さんの、お父さんのところ  
に行き、一ばんすごしました。一ばんすごし  
たり、もりあかのひな人いよの、ところに行

きました。そこには、ボラソチヤノの人たち  
がいきました。そして、ぼくは、そこに行く  
ほくも、おはせてくれました。そして、夜は  
人を食いました。それには、ワキキーや、五  
も、ごはんがありました。そして、もりあか  
で出来た友達もいました。その夕くは、大  
井町の人たちでした。そして、そこには、大  
船渡の人もしました。そして、そこでは、お  
いあかにある、温泉に行つて、おらるにハ  
しました。そうやって、ぼくたちを、やさしく

14

13

しくしてくれました。もりおかに行ってからは、久しぶりに、ボールを使った遊びをしました。それは、サッカーです。たまに、そこでサッカーをしたりして遊びました。もりおかにいつ、何ヶ月かすぎたころに、大船度から来ていた、車屋さんか、もりおかに友達がいるからといって、車をくれました。そして次の日、車がとら着くして、ぼくたちは、大船度へ行きました。その時は、赤崎のところかたまたま見つかつたのでいきました。その

時に、ちやうど学校が始まつたころでした。朝は、お母さんに送ってもらって、帰りは、三時のバスに乗って帰りました。そして、その生活が始まつて、とうとう夏休みがやってきました。その夏休みはきつかつたのです。まず、夏休みが始まつて、ぼくは、急な坂をかりて、バス停の、一佐のレというところまで歩きました。そこまでは、まだ良かったのですが、そして、帰る時、バスに乗りました。そして、急な坂のところまで歩いていきました。大変

15

16

たったのは、ここらでした。ぼくは、あそ  
こを、地獄坂と読んでいます。最初のこ  
ろは、重い荷物をかたにせおって、地獄坂を  
上がります。かたはなんかいりょうな、苦  
しいのをなんかに思いました。ぼくが、目印に  
しているところに来ると、なんかなままで賣  
上に、つかねが来ました。その、マシヨ  
ンみたいなところに来ると、地獄から天国ま  
で歩いて来たように、部屋に入ったりまです  
冷たい庫にある何かしらのお水のお時が一番

幸せと思うところでした。そして、まず、  
あそこへいきます。そして、テレビを見ていると、  
自然にわています。そして、そのままわてし  
まうこともありました。そして、地獄坂を上  
がり、下りの日々が続きました。そして、  
綾里の町で家をさがしたりしました。そして、  
ら、お父さんの友達だった、小西みさちや  
ん家の上に家があることがわかりました。そ  
して、そこで住むことにして、ある日、つ  
くしました。そして、家に物が入る時、こ

ねて、あの、地獄坂からかいほろとれると思  
 いました。そして、その日の夜は今ままで  
 最高の夜でした。そして、そこは、高いところ  
 にあるので、もう寝た。で、  
 そして、あれから一年ほくは、食事の大切  
 さや、物の大切さ、人の大切だということ  
 思い、そして、今ではもう、地獄坂もいい思  
 いで、たとえ、あります。

三月十一日をふり返って

四年

綾姫ホールにひなんした時、風はつめたく  
夕日がしずみ始めていました。

あの日は、いやなゆめを見ているようで、  
「ゆめ覚めろ、ゆめ覚めろ」と思いました。

私は、三月十二日の朝、家に帰りました。

家の前の川には、船が三せき今にもこち  
来そうながんじで積み上がっていました。家  
の中に入ってみると、神になの物、食器だ

の物二かいの私の部の物、しん室に置いてあ  
る思い出の品々、その全てがおちてわれて、

ふとんで投げ出されていました。私は、

これは、本当に私の家なの、と思いました。

その時、私はふいに思い出したのです。あの

日の夜の事を、私の親せきの人、なきなが

ら、

「萌々ちゃん、おじちゃん達の家スポンとぬ

けて、無くなってしまうたよ。」

と言った事を。その時私は、

3

4

「なんで、なんでおじちゃん達は悪い事もし  
ていないのにこんな目に。あの私の小さい  
ころの思い出がいっぱいつまった家をどこ  
にやったの。津波さん、あなたはこの思い  
出を全て返せるの。何とか言ってよ、ねえ。  
おじちゃん達の方が悲しいのになきたいの  
に私は、とうとうなき出してしまいました。  
その時、私はバに決めました。私の得意の  
伝とうぶようを使ってバにきずをおったお年  
よりを元気づけよう。」と、

その日から、電気も無い、水も無い、食べ  
物も無い、大変なひなん生活が始まりました。  
せんとく物は家の前の川で、調理は、反しや  
式ストーブで、あたたまりながら、お風呂は  
やかんでわかしたお湯をベビーバスにためて  
じょうほうはラジオかぶうわさで、くらくな  
ったらふとんに入る。このような生活がちょ  
っとしかながったはずなのに私には三ヶ月ぐ  
らいに感じました。でも、時々、楽しい事も  
ありました。ひなんじよの外で、たか広君や

6

5

みい花ちゃんとおにぎりをしたり、自衛隊の人達に向かってけいれいたり、かくれんぼしたり、石投げ競争したり。一日一日がこんな長くて楽しい生活でした。

でも、お母さんに、

「萌々ちゃん、もっとおとなしくしてなさい。分かった。」

とおこられました。けど、

「やーだよーだよー。」

と言っている。いつも外で遊んでいました。

私の家では、よくキャンプに行きます。なので、キャンプ用品がいっぱいあります。そして、ゴミやきもしました。

でも、日がくれたらねる。という生活がまだまだつづきます。

「もう、あきた。はあ、神奈川のお父さんの元へ行きたいよー。」

と思っています。

「萌々ちゃん、電気が通ったよ。水も通ったよ。」

とおじさんが来ました。

7

8

「えっ、本当なの？」  
お母さんにブレーカーを上げてもらって、  
テレビをつけました。  
「写った」。

何ヶ月ぶりでしょう。やっとのやっでテレビが見れました。

その日から、町も人も家も、全てが少しづつ元にもどって行きました。

しばらくして、電波が良くなると、色々なところから、電話やメールが来ました。その

中で一番長電話をしたのは、私の大好きな大好きなお父さんでした。

「もしもし、お父さん。元気」。

と私が話すと

「元気だよ。萌々ちゃん大じょうぶ。こわかった」。

と自らい隊の活動でいそがしいはずのお父さんの声が聞こえてきました。その時、生きてるか生きてないか分からなかったお父さんの声が聞こえた時私は、うれしくて、会いたく

て、バがふるえました。

私は、そのお父さんの電話で、とっ  
れしい事を聞きました。もう

「お父さん、来週岩手に戻るから。」

「本当。早く帰ってきてね。」

かま石にお父さん进行た時、お  
父さんが、かがやいて見えました。

「や、ぱりお父さん、てカッ  
コイイ。」  
と思しました。

お父さんが、ぼうさいグ  
ズを隊から持っ

て来てくれました。

「さすが。」

や、ぱりお父さん、てカッ  
コイイ。

もう、あれから一年という月日かたしまし  
た。町にもうガレキはありません。でも、あ  
の日あの時波にさらわれた家はもうありませ  
ん。

私は、大人になったら、お父さんのようにな  
入になりたいです。そして、何かさいがい  
があつた時に色んな人を助けて、一つでも多く

の命を救いたいです。  
このしんさいを乗りこえた私たちは、きつ  
と強くなっ  
たはずで  
す。

三月十一日

四年

三月十一日、六時時間目で勉強をして  
た。いつもと同じようにふつうでいた。  
なり、ガタガタと大きなゆれがきました。  
こんなゆれは、初めてでした。すぐ、おさま  
るかと思ったら、何分も続きました。私は前  
の席でした。先生の机のたな、全部が落ち、  
後ろのがもしが号の本が、ガタッと岩が落ち  
てくるように落ちてきました。机の下にかく

2

1

れると、まだちがう教室にいた人達に来て、  
かくれました。四年教室はぐちゃぐちゃでし  
た。下の方から  
にげろーい。

と言う声がしました。私はすぐ、ジャンパー  
を取り、くつをはき、校庭に出ました。校庭  
にひびが入っていました。うわっ、ひびが  
入ってる。と私はびっくりしました。

綾姫にひなんしました。建物から、かあら  
が落ちて、おれていました。何回も地震がキ

3

4

ました。一分に何回という感じで、ゆれる、  
おさまる、ゆれる、おさまるという感じでし  
た。ゆれていたのは、分かりました。けれど  
周り物を見ていて、「本当にゆれてるのい  
思っできました。消防車は、ゆれてるけど  
「目のさっ覚があいと思いました。ゆれてい  
るとき、泣いてる声が聞こえました。その声  
がずうっと聞こえているとき、「もう、いや  
だ、いやだ」と自分も泣きそうでした。こ  
も、だめだ。泣けばぎゅくに暗くなるいと思

いがまんしました。

綾姫では、あぶないので、駅にひなんしま  
した。もうふなびをかけて、すわっていまし  
た。私は、津波がどこまできたか知りませ  
でした。

駅の次に、その上に行きました。上のこ  
ろは、草がはえて、ちよっと遠くが見えま  
した。いっぱい人が、そろそろと集まっ  
きました。そこで親がきて、帰る人もいま  
た。まだ、ばあちゃんはきませんでした。そ

5

6

れは、港の植木豆ふの人達がいますからです。  
ばあちゃん綾姫で説明してくれました。

「豆ふ屋が流された。だから、うちにいるか  
ら、また、家にもどって見てくるから。」

と言われ、まだきませんでした。上の方にい  
るとき、私は、ジャンパーだけ着ていました。

「自分は別にどうでもいい。みんな、他の人  
にやればいい。自分より他の人だ。と思いま  
した。なので、私は、ただ立っていて、みん  
なにかけていました。

「きちんとすわって、あっ、だいいようぶ。

寒くない。

と声をかけながら、言いました。先生からも  
言われましたが、「他の人に入って、安心し  
てほしい。」と思い、入りました。

上にいたとき、耳にどうぼうが入ってき  
ました。

「学校まで波がきたって。」

と言ったことが聞こえました。私はその人に

「波、学校にきたんですか。」

7

8

「学校に渡、きたよ。  
と言われ、うそっ。とびっくりしました。き  
たこと、伝えました。」「学校だけは、きてほ  
しくなかった。と思いました。」

その後、野々前の方を通り、BとGにいき  
ました。先生から  
「貴広から、後ろにならないようにい  
と言われ、私も貴広君の後ろにならないよう  
に」

「速く、前に行つて、歩いてもいいから、急

いでい

と声をかけながら、行きました。

その光景を見て、「うそっ。と思いました。」

それは、BとGに行く坂をのぼっていたら、  
下の畑で、幼稚園まできていました。それも

ももちろんの家の道路の前に船がきていまし  
た。「こんなに来ていたの。そんなはず。も  
う本當いやだ。と思いました。他の人も、み  
んびつくりしてました。」「もういやだ。と  
さけびたいぐらいでした。」

BとGについて、体育館に入りました。そうすると、みんなの親がきて、帰っていききました。そのときも、地震がなり続いていました。BとGがこわれる人ではないか、心配でした。みんなが帰るにつれて、気持ちがあせってききました。ばあちゃんはまだ、きていきませんでした。自動ドアのところに行って見てみたり、もどったり、うろちょろしていました。どうやってもきませんでした。

BとGに残っていた人達と、中学校にいき

ました。外に出ると、暗くなっていました。中学校で、もちや人や貴広君達と話したり、遊んでいました。すると、ばあちゃんがやっ、と、きてくれました。「あっ、やっ」ときてくれた、良かったあーと、とてもうれしかったです。

三月十一日からの生活はつらかったです。水はない、電気はつかないといういふうたいでした。三月十一日すぐ帰ったときは、地震がたくさんなっていました。いいちゃんにた

11

12

きついていたいました。ぬいぐるみをだいて、ね  
ていました。きょうふばかりでした。「こわ  
い、こわい、こわい」と思っていました。夜  
は、ずっとおていしました。が十一時ごろにおき  
てしまいました。朝、起きれば、日差しが入  
ってくるのは、茶の間のまじだけです。夕方  
ごろには、そのまじからの光だけが明るくだ  
けです。真ん中に、ロウソクをポシンと置く  
だけです。夕飯は、ちよつと暗いなが、ご飯  
も食べました。なので、いつものように、食

べたい、食べたい。と思いません。いつもよ  
り、食よくがなくなります。それに、お父さ  
ん、お母さんと会ったのは、三月十一日から  
三日後です。それまで全く会えませんでした。  
いきなり、車がきて、そしたら、お父さんと  
お母さんでした。お母さんは泣いていて、  
「ああ、良かったあ。さや、みお。良かった  
あ。」  
うれしくて泣いていました。電気がつかない  
ので、冷蔵庫の中の食材があぶなかった

13

です。  
食べ物、立根のマイヤで買いました。な  
らぶと、たくさんの人でした。ずうらあとなら  
んでいました。品物は、飲み物、果物やおか  
し、野菜などありました。他の人も、どんな  
に急いでいても、取り合いにはなりませんで  
した。

大船渡に行くとき、学校のうらの道路を通  
りました。すると、がしきで歩道がうまっ  
ていました。『本当に学校のいつも通っている

14

歩道なのにと、びっくりしました。行くとき  
は初めて、大船渡に行ったので、行くときは  
おどろきました。

電気は綾里は、ついでにきませんでした。大  
船渡は電気はついていました。水は出ていま  
せんでした。お母さんの実家は、大船渡の下  
船渡です。なので、下船渡の実家にいつて、  
とまっていたいました。平日は、お母さんは会社  
に行き、私と美旺と実家わばあちゃんは宿題  
や、水くみの手伝いでした。けれど、何週間

15

か一ヶ月ごろには、帰って、電気も水も使えるようになりました。  
 今日、三月六日、学校でもくとうをししました。なくなつた人にもくとうをしました。先生が、  
 「もくとうい」と始めました。目を閉じて、「天国でゆつくり、してください」と思ひながら、やりました。

16

私は、三月十一日からずっと音楽を聞いています。聞くと、落ち着きます。「上を向いて歩こう」などたくさん歌がありました。  
 今年、もうすぐ三月十一日です。十一日にそのときのことを思い出してみます。いつまでも、この「三月十一日」をおそれないようになりたいです。

東日本大震災の事

四年

あの日、やりのこしをしていたら、いきなり「ドーン」という強いゆれを感じました。みんなびくくりしていました。

副校長先生から、

「にげろあ。」

と言われて、あわてて外へ出ました。あの日、とても寒くて雪もふっていました。私はジャムバーを着ていたから、たので、とても寒

かったです。

綾姫ホールに、一回行きましたか、あまりにもゆれがすごいで、駅の方へと向かいました。駅も、大きい建物なのでうらの方へとにげました。私は、ジャンバーを着ていなかった。毛布をかけてもらいました。立ちまわると、大きな白い波がおしよせて来ました。私は、おはあちゃんや、あいちゃんの事を思い出しました。あいちゃん、おはあちゃんは、毎日海岸に行っているのです。

3  
 ぶく心配しました。私は、妹の事も考えてしま  
 まい、泣が出たけど友達にはげまされて、少  
 しは、不案も消えていったようでした。  
 夕方までお家の人を待っていても、来ない  
 のでB&Gに行きました。中は、とても寒く  
 て、毛布にくるまってみんなと一緒にいまし  
 た。次々に、地震がなるのでどうなるのか。  
 と思いました。お家の人に来て、次々と四年  
 生は帰っていきました。すくさみしくなり  
 ました。

4  
 しはらくして、中学校は温かいからそこに  
 行こう。と言われました。毛布を持って行ま  
 しました。中に入ると、寒くて冷えていた体が  
 いっきにとけていくようにほんわりしていま  
 した。私は、もう少しで来るんじゃないかな  
 と思っはかりました。時計を見ると、もう  
 五時半ごろでした。私は、今までご飯を食  
 っていた時間だな。と気付きました。けれど、  
 今はぬころがっている事しか出来ません。  
 私は、今までとめくらに辛せだったんだろ

と鬼いました。こんなに辛い鬼いはした事  
 なかったの、苦しさを初めて知りました。  
 ずっとずっと待っていました。けれど、誰  
 も来ません。四年生で残っていた人は、貴広  
 君とこうすけ君と私しかいませんでした。こ  
 ても、さみしかったです。けれど、なりに  
 お姉ちゃんがいだったので一緒にいました。お姉  
 ちゃんに、  
 「こわくないの。」  
 と聞いたら、

「こわいに決まってるじゃん。」  
 と悲しそうに言いました。私は、そうだよ  
 ね。と思いました。

私がお姉ちゃんと話している時、副校長  
 先生が、  
 「道路がぐちゃぐちゃで通れないので、2月  
 か3日は待たないと無理だろうです。」  
 と言われました。私は、すごく悲しくなりま  
 した。心の中で、早くあいいちやんとおは  
 あちゃん、お父さんとお母さん、妹に会いた

いよあゝと悪い続めました。夜は、すごく暗くて、外に少し出て空を見ると、たくさんのもきれいな星がかがやいていました。私は、星を見たらますます悲しくなりました。

水もないし、食べ物もなく、とてもつらい思いをしました。他にも、色々な人がいました。赤ちゃんをつれていっしょうけんめいあやしている母親もいました。私は、どうしても、妹の事や家族の事が頭からはなれませんでした。何度も何度も思い出してしまいました。

そのうちに、ぬれなくなっていました。お姉ちゃんも起きていました。お姉ちゃんはまだもうぬううだったのでも話しかけるのはやめました。12時から10時くらいに、ピザマンのキジを食べました。少し、冷めていたのであまりおいしくありませんでした。でも、今は、こんな事を言っている場合じゃない。と思っています。私は、味わって食べました。水がないので、少しづらかったです。なんとかあなかに入れると、腐びくになっ、良かったな。と

思いました。ぬむたくなってきたのでぬよう  
とした時、地震が強くなりました。私の上は  
バスケットボールの鉄がだんだん下がってき  
て横に動きました。すごくこわくなりました  
でも、横によけたのでなんとかだいじようが  
だろう。と思ってぬました。

震災から次の日、朝起きたらもう、みんな  
起きていました。そして、ステージでおかし  
みたいなのを配っていたので、私も行しまし  
た。私は、急いでいたので、てきとうに選ん

ました。すると、私の苦手なあんこが入った  
おもちでした。お姉ちゃんに、こづかんする  
と言われましたが、食べる事にしました。私  
がきらいなあんこを食べてみたらとてもおい  
しく感じました。私は、好ききらいなく食べ  
る事が大切だという事をこの大震災で初めて  
知る事が出来ました。中学校の体育館にいる  
みんながうれしそうに食べていました。  
私は、中学校の体育館でみいかちゃんとい  
ました。みいかちゃんは、私たちとちがう

11

12

所に収めていたそうです。みいかちゃんは、しばらくして向こうの方に行ってしまった。りぶんくらい時間がたちました。すると、りぶんちゃんのおはあちゃんが、  
「おじいちゃんが来てるよ。」  
とにこにこしながら言っていました。私は、  
「まさか。」と思いました。私は、  
「本当ですか。」  
と喜んで言いました。すると、おじいちゃんが入り口の方から入って来るのが見えました。  
私は、「ほんとうだあ！」と表じようがいっきに変わりました。私とお姉ちゃんは、すごく喜びました。私は、  
「おはあちゃんと、奈葉は？」  
と聞くと、  
「家にいるよ。」  
とにこにこしながら言いました。私は、あまりにもうれしくて泣が出たし、不案内もっかに飛んで行ったみたいにな持ちが晴れたような気がしました。

13

14

私は、みいかちゃんのことを思い出しました。そうゆう事で、みいかちゃんも私の家にしほらしくいる事にしました。私は、みいかちゃんも一緒だったのでますます元気になりました。今まで、みんなが親切にしてくれたから、こんなに元気になれた事だとも思っています。

家に帰る道は、すごくきんちょうしました。見ると、がしきがたくさんうまっていたからです。今まで、見た事のない風景だったの。心がけしいためました。ーあんなに、にぎや

かな町だったのに、こんな事になるなんて...と思いました。家に帰るまでの道は、とてもおんこくでした。家に帰ったら、おはあちゃん、おはあちゃん！  
ーおはあちゃん！  
と言、ー飛びつきました。お母さんも、後から泣いて来ました。次の日は、水くみなとでとても大変な思いをしました。ですが、家族全員が部事だった事は、今でもきせき。とも言えると思いました。部事になによりでした。

15

16

一年たつて、今は今まで通り通りの生活をして  
います。けれど、水はせったいに出しっぱなしにしない。むだ使いはしない。物を大切に  
する。人と仲良くなる。助け合う。という事  
をいつも言われています。特に、毎日言われ  
ている事があります。それは、強い地しんが  
来たら、とにかく高い所へ。遠くでなくても  
いいから、とにかく高い所。高い所。  
地しん来たらせったいにびるんだぞ。  
とおじいちゃんから何回も言われています。

もういいから。  
と私は言いますが、本当は、いつでも頭に入  
れておかないといけない事です。私は、いつ  
もこう思います。

今日は、もくとうをささげました。こくな  
られた方々、悲害にあった方々、家を亡くし  
た方々に、心からお見まいもうし上げます。  
死んでしまった方々は、目とうをささげます  
ので、しずかに収めて下さい。と心のなかで  
言いました。初めて津波のこめさを知りまし  
た。

あの時の事

私は、あの時をふり返って見た。あの大きな地しんは、急に私達の元にやってきた。あの時は、二時四十分だった。そのころ私は、かぜで学校を休んでいた。急に地鳴りがした。

ゴォゴォォ。

と。私は、こんな地鳴りは初めてだと思った。その思ったのと同時に地面がぐらりと動いた。

地しんは、すぐには止まらなかった。物がいつぱい置ける音が今でも耳に残っている。私は、こわくなつてこたつにもぐった。お母さんが

「出ておいでくずれたらあぶない。」

とさげんだ。急いでこたつから出た。こたつから出て目についたのは、ぐちゃぐちゃになっていいる私の家とおじいちゃんだった。おじいちゃん、私においがびすった。私は、すごく不安だった。それから時間がたちおじい

「ちゃんか  
船に行く。」

と言いはじめた。おじいちゃんは、歩き始めた  
お母さんが

「車で行かないとまにあわない。」

とおじいちゃんに言った。やがてその言葉が  
おじいちゃんをたすけたんだ。私達がおどお  
どしているとき近所のけいさつが、

「もうまにあわないにしろ。」

とさけた。急いで車に乗りあやひめへと向

かった。話によると私達が行った後にすぐつ  
波が来たと聞いた。私は、けいさつの人に命  
を救われたと思った。しばらくして駅まで走  
った。もうかぜなんかその時にはへっちゃら  
だった。だってそれよりも大変な大変な事が  
起きたから。3時間も4時間も駅でたいきし  
ていた。しばらくして中学校に行った。暗か  
った。人がいっぱいいた。

でも私は、そんな事より心配な事があつた  
それは、おじいちゃんだ。とにかくどうなっ

たのが心配だった。あのやさしいおじいちゃんがいないうちはさみしくて静かだった。もしかしたり：と思ったらなみだがポロポロ流れてきた。そのなみだは、とまらなかつた。十分ぐらゐしておさまった。電話もつながらない。おじいちゃんがりしているかとにかく不安だった。私は、夜だれよりも先にねた。ゆめには、おじいちゃんが出てきた。いつもと変わらないやさしいおじいちゃんだった。次の日になってはおじいちゃんも帰ってこなかった。もう死んだのかと思った。それから少し時間たつて美咲ちゃんのおじいちゃんが来た。

6  
「いっしょに行こう。」

と言われた。苦しかったその時は、とてもうれしかった。救いの言葉だった。車に乗って美咲ちゃん家に向かう時見てしまった。自分の家が無かった。信じられなかった。これからどうしようと考えた。何も思いつかばなかった。美咲ちゃんの家に着いた。美咲の家は、

あの体育館にくらべたらとても明るかった。  
私は、美咲ちゃんにおじいちゃんの事を話し  
た。美咲ちゃんは、やさしく聞いてくれた。  
美咲ちゃんとは、大の仲良しだった。私の  
心のささえになった。美咲ちゃんといること  
でおじいちゃんの事を思い出すようになってき  
た。でも心のどこかに不安な気持ちもあった。  
次の日信じられない事が起きた。美咲ちゃん  
の家へいると聞きおぼえのある声が聞こえた。  
急いでげんかんに向かった。やっぱりおじい  
ちゃんだった。おじいちゃんの元気な顔を見  
たら心のどこかであつたモヤモヤが消えた。  
ホッとした。安心した。元気になった。しば  
らくしておじいちゃんがまた船にもどってい  
った。おじいちゃんは  
「いっしょにいた仲間をいっしょだからだい  
いよるび」  
と言った。生きてて良かったあと喜こび、わ  
れしさ、楽しさがこみ上げてきた。夜は、こ  
ういんして寝れなかった。ずうと目を開けて

いた。美咲ちゃんは、自分の家に来てボツとしたのかすぐ寝むった。私は、次の日の夜ぐうに熱が上がった。治ってはい、またなり治うては、またなるのくり返した。美咲ちゃんとも会えなくなつた。仲良しだった美咲ちゃんと遊べないのは悲しかった。

でも、そんなある日美咲ちゃんがお見まいに来てくれた。手紙をくれた。その手紙には「いっしょに遊ぶのを願ひよ」と書いてあった。月、日かたつにつれてかぜもひかなくな

なつた。私は、今まで私達といっしょにいてくれた美咲ちゃんの家の人に感謝しています。そしてあの日のことは、ぜったいのすれない。

そして今は、仮設にいます。仮設下のくらしは、大変ですが元気にくわしています。今では、体育館もすっかりきれいになり使えるようになりました。学校でみんなと勉強できるとても楽しいです。そしてずうと前は、水は、出なかつたし電気もつきませんでしたか

どちらとも大じやうぶにないおちついた生活が  
できています。

そしてもう少しで三月十一日です。その時  
は、ちゃんともくとりをしたいと思います。三月十  
一日は、日曜日で学校ではもくとりが出来な  
いので学校でももくとりをしました。これが  
らも明るく元気に育っていきたいです。

三月十

177日

四年

三月十一日、私は、大きなゆれにおそれ  
ました。すぐに先生の合ずでにげました。

校庭に行くと、地面にひびが入ってました。

私は、頭が真っ白になりました。そして、綾

姫ホールに向かいました。私は、とにかく、

にげる気持ちでいっぱいでした。私は、一歩

が来るかもしれないと思いました。

綾姫ホールに着いて、できるだけ物からは

なれてしやがみました。こわくて、寒くて、

かたがブルブルふるえました。こわいよ。

どうしようミ。と言いました。私は、すぐに

家族の事を思い出しました。私は、お母さん

が大船渡にいるのにミ。と泣きながら思いま

した。

しばらくして、駅の方へにげました。もう

道路に出て、みんなと手をつなぎながらまっ

すぐに駅に向かいました。

駅の後ろの方へ行っ、シートの上にすわり

3

4

ました。私は、も をかぶりながら、  
 「お父さん、お母さん、お兄ちゃん、おばあ  
 ちゃん、ごめいよ。」  
 と泣きながらつぶやきました。こわくて、寒  
 くて、しょうがありませんでした。  
 今度は、B & Gに走って行きました。雪が  
 しんしんとふっていました。下を見ると、私  
 は、上ばきをはいて走っていました。私は、  
 「あわてて、くつ はけなかつたんだ。」と  
 思いました。

B & Gに着いてまず、中に入りました。も  
 をかぶって、むかえに来るのを待っていました。  
 した。今ごろ、お母さん達はいと心配にな  
 りました。  
 しばらくして、先生が、  
 「みのりちゃん、お父さんがむかえに来たよ  
 と言われたので、涙がぶわっと出てきました。  
 私は、「良かった。」と思いました。  
 そして、車に乗って家に向かいました。車  
 の中は、とてもあたたかかったです。私は、

お父さんに、  
「おばあちゃんはい。大丈夫なのよ。」  
と小さな声で言いました。お父さんは、  
「大丈夫だよ」とニコッとこっちを見ながら言いま  
した。私は、うれしい気持ちでいっぱいでした。  
た。

そして、家に着いて、中に入ると、皿が下  
に落ちてわれていました。お父さんが「自分  
の物をリュックに入れて。」と言われたのです  
ぐいに入れました。

外に行くと、おばあちゃんがおいぎりを作  
ていました。おばあちゃんに、  
「み、こ、もうちょっと服、着たら？」  
と言われたのでたくさん着ました。おばあ  
んのおいぎりは、とてもおいしくて、また、  
が出てきました。

しばらくして、お父さんは、  
「ここは、きけ  
んだ。」と言ったので野形公民館に向かいまし  
た。

公民館には、たくさんの人がひなんしてい

7

8

ました。私は、時間を見ようと思って、お父さんのけいたいを見たら、画面には何も写ってはいませんでした。私は、ますますこわくなりました。ひなんしている人で、いわさきの地区の人もしました。

夜になって、私は、ふとんをしいて、他のお母さん達が作ったおにぎりを食べました。私は、「お母さん、お兄ちゃん、大丈夫かなあ」と心配になりました。私は、夜もねむれませんでした。じしんが来るたび、私は、ますま

すこわくなりました。すると、向こうから、だれかがこっちに走ってくるのが見えました。お兄ちゃんでした。私は、思わず泣きながらお兄ちゃんに、だきつきました。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん。心配したよ、と言いました。お兄ちゃんも、私の顔見て、喜んでいました。」

三日がすぎて、私は、「お母さん。まだかな」と本を読みながら言いました。あっ

んも、いつもより静かでした。  
夜になって、昨日と同じにふとんをしきま  
した。そしたら、向こうから、白いジャンバ  
ーを着た人が「みっこ」と言いながら「ち  
へ走ってきました。私は、お母さんだ！」と  
思いました。お母さんは、  
「良かった。みっこ、あつし。」  
と泣きながら、私とあちゃんをだきしめま  
した。私も、すごくうれしくて、また泣いて  
いました。

次の日の昼間、家にもどりました。家は、  
ぐちゃぐちゃだったので、かたづけました。  
タがたになり、私は、リモコンでテレビを  
しげようとしましたが、つきませんでした。  
電気もつけようとしたが、つきませんでした  
した。

夜になって、電気がつかないので、ろうそ  
くに火をつけてごはんを食べたりしました。  
ねる時は、早くて、六時にねました。いつも  
よりおそいので、ぜんぜんねられません。

11

12

だ。お父さんが、

「昨日は、となりのおじちゃん家に行っ

水をもらおう。」

と言いました。私は、

「なんで、水道出ないんだよ。」

と言うと、

「おじちゃん家は、山の水が出てるから。」

と言っていました。

そして、次の日。となりのおじちゃん家に

水ももらいに行きました。私と、あっちゃん

がバケツに水をくんで、お兄ちゃんにわたし

ました。お兄ちゃんは、お父さんにわたして

それを、大きいペットボトルに何回も入れま

した。私は、「電気も、水も使えないと、大変

なんだな。」と思いました。

そして今、水を出るし、電気も使えるし、

いつもと同じくらしをしています。私も、す

ごく元気です。そして、毎日が楽しいです。

校長先生は、「年月がたっにつれて、記憶がた

んだんうすくなります。」と言っていました。

13

もくとうのとき、私は「天国でやすらかに  
ねむって下さい。町は、いつかきつともとに  
もどります」と心の中を言いました。  
これから、どんな事があっても、前を向  
いて、生きていきたいと思います。

14

あれから一年

四年

あの日のあの時間、私は、やりのこしをして、列にならんでいました。次の瞬間、とてもおそろしい地震が起きるなんて、考えることもできませんでした。列にならんだ数秒後、「ミシッ」から始まり、その後、教室が大きくゆれ、机の上の物は落ち、ライトも落ちるような地震が起きました。こわくて、いつの間にか手には汗をかき、机の足の部分を必死ににぎっていました。とても長く、大きく、小さく、ものすごいいきおいがある地震でした。

「ジリリリリ」

となつて、先生が大きな声で、

「物を持たずににげろ！」

と言いました。私は、上着を持たずににげました。校庭は所々にひびが入り、とてもおそろしく、これはどんなにきけんな地震なのか分かりました。走りました。もう必死でし

た。綾姫ホールでも、予震が続き、次に駅に行きました。だんだん寒くなってきました。駅の上に行ってしばらくたち、立つと、いろいろな何か、田浜の水門を通りこしていました。お母さんが来て、

「おはあちゃんたちは大丈夫」と言って、帰る道を見に行きました。

次は、B&Gに行きました。暗くて、こわくて、ただひたすら「お母さんはまだかない」と思っていました。でも、B&Gに来るとき

の、まだ理解できない水だらけの綾里が忘れられませんでした。お母さんが、山を通っておはあちゃんたちがいる本下さんの家に行くと言って、その家に行きました。行っておはあちゃんに会って、  
「友子。生きてたか。よかったよ。」と泣きながら言いました。おはあちゃんは、私とお母さんが死んでいると思っていた事を言いました。その日の夜は、あまりぬむれなくて、夜、おそくまで起きていました。何日

6

かたち、今度は、石浜の親せきの家に行きま  
した。石浜に行つて二日くらいたつと、食べ  
るものかなくなつてさした。その時は、歩  
いて一時間もかかる山道を通つて、「ああ。  
つかれた。のどがかわいた。足がいたい。水  
が飲みたい。」と思ひながら歩きました。「綾  
里に着くのはいつかなあ。」と思つて、ふらふ  
らしながら歩いていくと、田浜の人が  
「乗つていくか。」  
と言つてくれたので、あの時は本当に助かり  
ました。

石浜に来て五日あたりがすぎて、こうへい  
おじさんが心配になつてきました。でも、そ  
と生きてる」とはげまし、「ここにいろ」と  
希望を感じていた山下さん家にもいない時に  
は、「どこかで記憶をなくして生きていろ」と  
はげましてすごしました。それから何週間か  
すぎ、だれかがたずねてきました。それは、  
お父さんでした。お父さんとたずあつて、泣  
きました。「もう生きていない。」そう思つてい

たからです。お兄ちゃんもその何週間後に来ました。仕事をいっしょにしている人に送られてきました。すえこお母さんは、しゅうきお兄ちゃんを見て、笑いながら泣きました。石浜のおばあちゃんは、老人ホームで死んでしまいました。いつも石浜に行った時にやさしく笑っててくれたりしてくれたおばあちゃんが死んでしまうのは悲しかったです。

つ波から二ヵ月ほどたって、私・お母さん・お兄ちゃん・おじいちゃん・綾里の家でく

らしました。食べ物にはバナナを四等分にして食べました。水は、下の家の井戸の水をペットボトルに入れて、一日の平均もリットルくらい運びました。おふろはおけに火でふっとうさせたお湯と水でした。せんたくは足でふんでしました。

綾里の家では、ほぼ働いて、ひまな時はラジオを聞いていました。たまに買い物に行くとき、特にカンフラーメンがなくなっていていました。

9

10

地震から二カ月くらいたって、いつものように働いていると、盛岡に住んでいるところの大（まさる）兄ちゃんと同じく盛岡のこうき兄ちゃんが来ました。そして、茶の間に集まると、だんだん、糸がとれたように泣き出してしまいました。たぶん、ぶじでいてうれしかっただんただと思います。そして、お兄ちゃんたちからパワーをもらい、元気になりました。中学校に勉強をしにも行くくらい月日がたつと、こうへいおじさんの知らせがきまし

た。それは、死んでいる体が見つかったという知らせでした。今まで、そうそくの近くで、こうへいおじさんの写真とごはんをおそなえして、生きているようにいっていたのに、死んでいるという知らせが来て、とても悲しみました。

今日は、ついうとうをしました。私は、天国のおじさんに話しかけました。あの大地震から一年がたって、今は、くらしがとも楽になりました。つ波があった直後のくらしとく

らべると、今は、とても考えられないような  
 ことです。つ波の時の悲しい思い出は、今は  
 だんだん整理できるところになってきました。  
 つ波の時の思い出は、忘れてはいけない、大切  
 な物なので、その思い出を忘れないようにし  
 たいです。

そして、もし、またこのような津波が来た  
 ら、その時の気持ちと、つ波のおそろしさを  
 忘れないようにしたいです。

12

11